慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

| | |
|---|---|
| Title | 書評：「パフォーマティブ・シンドローム」の中の調査実践とは：<br>藤田結子・北村文編『現代エスノグラフィー：<br>新しいフィールドワークの理論と実践』新曜社、2013年 |
| Sub Title | |
| Author | 岡原, 正幸(Okahara, Masayuki) |
| Publisher | 三田社会学会 |
| Publication year | 2014 |
| Jtitle | 三田社会学 (Mita journal of sociology). No.19 (2014. 7) ,p.123- 126 |
| JaLC DOI | |
| Abstract | |
| Notes | 書評<br>目次のタイトル：「書評：藤田結子・北村文編『現代エスノグラフィー』」 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20140705-0123 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 書評：「パフォーマティブ・シンドローム」の中の調査実践とは

藤田結子・北村文編『現代エスノグラフィー―新しいフィールドワークの理論と実践』

新曜社、2013 年

岡原　正幸

極端な話、「エスノグラフィーの時代」と言ってもいい。エスノグラフィーという手法が、民族学や人類学という分野を越えて、社会科学一般に、いや、ビジネス、マーケティングの分野にまで進出している。アカデミズムという狭い世界で見ても、その扱いは変わった。かつて、社会学専攻はもちろん、フィールドワークが必須の人類学分野でさえ「まずは理論的整理をせよ」と言われていた大学院修士課程、だが、そこに求められる研究スタイルは変容し、大学院生たちも現実世界のフィールドに「最初から」入り込んでいる。

14 名の著者が 4 部構成でコラムを含め 36 の項目を執筆する、それだけ多種多様な内容を豊かに展開する本書について、ひとつひとつを具体的に紹介する余地はない。しかし全編を貫くのは、本書が扱うエスノグラフィー／フィールドワークという調査実践が、旧来のものと全く異なるパラダイム上で展開されているということだ。1960 年代後半から姿を現し、その後、着実に様々な意匠をとりつつ展開されてきているパラダイムシフト、運動、兆候に連動したエスノグラフィー／フィールドワークの理論と実践である。

クーンの科学革命論、ファイヤーアーベントの知のアナキズム／ダダイズム、フーコーの真理論や権力論、ソシュールの言語学、ヴィトゲンシュタインの言語ゲーム論、ゲーデルの不確定性原理、ハーバーマスが議論する認識と利害、イリイチによる専門家権力批判、社会構築主義、そしてデリダだなんだかんだと、ポストモダニズム、ポスト構造主義のポスト続き、もちろんフェミニズム、障害者運動、セクシュアルマイノリティなどの社会運動も重なり、旧来のオーソドックスな知（西欧、男性、健常、異性愛、経済的に恵まれた人々が作り出した制度）の台座は大揺れだ。

薬害や公害など科学的な失敗も重なり、知の社会的効用に対しても大きな疑問が投げかけられ、莫大な公共財が投入されている大学という知の制度への社会的批判も激化する。知識の所有者や権益者は誰でありえるのか、そのような知識の使い手である専門家とはどのような存在であるのか、そもそも専門アカデミズムという社会制度自体が批判されている。

普遍的で正統な知はあるのか、客観的な認識は成立するのか、政治的に中立な知識などあるのか、大学なるところで（資金を投じて）研究教育される種類の知はどのようにして選ばれてきたのか、専門家が素人に対してより正しい見解をもつのか、そしてその見解を素人に押しつ

岡原正幸「書評：「パフォーマティブ・シンドローム」の中の調査実践とは 藤田結子・北村文編『現代エスノグラフィー』」
『三田社会学』第 19 号（2014 年 7 月）123-126 頁

けることができるのか。知の専門家制度とは、といった疑義の中で、社会学や人類学という、ある人がある人の生活を調べて他のある人たちにその結果を伝えようとする試みは動揺せざるを得ない。

調査や理論という営みが「正しくて役に立つ」とは限らない。調査の対象とされてきた人々に何かを還元するとも限らない、となると、これは大ごとである。何のための、誰のための「科学」なのか。これまでは、実証科学という、つまりは、事実に対してより正しい認識を得ることのできるのが科学的な手法だ、という大義の中で行われてきたことが、実証科学そのものへの疑義の中で、立ち行かなくなる。

このような一連の「雰囲気」、その疾風怒濤の中、研究スタイルとしては、ジェンダー研究、障害学、ゲイレズビアン研究、文化研究、ポストコロニアリズムなどが新たに登場する。この雰囲気を本書では、《自己再帰性》《ポジショナリティ》《表象の政治》《ポスト構造主義とポストモダニズム》という項目で解説している。クリフォードの『文化を書く』、サイードの『オリエンタリズム』などは、底知れぬ実存的な不安や自己否定を社会や文化の専門研究者に与えてしかるべきだった。

この雰囲気に連座する様々な議論や試行を「パフォーマティブ・シンドローム」と呼びたい。パフォーマンス的転回、と呼ばれることもあるが、コペルニクス的転回や言語論的転回やその他もろもろのターンとは違って、社会的行為としての知の制度それ自体が問題にされているという意味では、アカデミック・ジャーゴンとしての「転回／ターン」に数えては間違いだと思う。そんなもんじゃないはずだ。

パフォーマティブ・シンドロームを真摯に身に受けることで、研究者がたどり着いたのは、実にシンプルな簡単なことで、自分自身や自分の研究活動が、現場にあって、身体をともない、そして他者との共同作業だという事態である。パフォーマンス性とはこれ以外のなにものでもない。

だがいままで科学というパフォーマンスは、自らがパフォーマティブであることを隠してきた。それによって真理の政治学を営み、既得権益を手にしてきたとも言える。それが揺らいでいる。改めて、科学とは、研究とは、調査とは何でありえるのかが問われている。主観的なものを排除するパフォーマンスによって、科学者や研究者は普遍的な存在であることを表現してきたが、それはつまり、人間であることを除菌して漂白してきたともいえる。本書はこの伝統に否を唱え、フィールドワークをする研究者が「ただの人間」であることを謳う。

そう、人間宣言なのだ。当たり前のことを当たり前に言うパフォーマンスでもある。

だから、調査する人間と調査に協力する人間の間で起きる恋愛感情もテーマになるし、自分が所属するグループのメンバーを相手にしたときの両義的感情もテーマだし、そんな自分自身についてあれやこれや思索することにもなる。人が人を前にして、ある具体的な現場に身をもって登場するとき、その相互行為によって構築されるリアリティこそがフィールドワークだと

いう当たり前の態度と、この姿勢ゆえに色々と湧き出てくる試行が、本書の立ち位置なのである。このことがいかに画期的であるのかを読者には痛切に感じて欲しい。

僕自身に関わる感想も加えよう。二カ所で僕のことが触れられているので、それについてである。ひとつは、井本由紀さんと堀口佐知子さんがチーム・エスノグラフィーの事例としてあげている「三田の家」。僕を含めて数人の教員と商店街組合によって三田で運営してきた「場所」である。様々な側面をもつ社会的実践だが、ここでの議論をふまえればこういうことだ。パフォーマティブ・シンドロームの中で揺らぐのは研究だけではない、そもそも、知の伝達や創発をめぐる社会的行為のひとつが教育であるなら、知なるものへの根底的な疑義は教育のあり方にも波及する。

正統な知の制度を前提にして講義なるものが成立するなら、揺らぐ知をめぐって、いかなる学びが可能なのか、学生と教員との関係はどのようなものでありえるのか、それらが問題化せざるをえない。そこで僕らが具体的な回答として設立し運営していたのが三田の家というオルタナティブスペースということになる。大学の外であって、大学の内でもあるようなリミナルな場である。実践的な教育、社会／地域との連携、プロジェクトベースの学習、グループワークやワークショップ、少人数教育など、この数十年で大学教育における形式的な変化は大きい。しかし、社会的効用を大学に求める外圧からスタートした新たな学びの仕方と、パフォーマティブ・シンドロームによって内側から模索された新たな学びの仕方は、たとえば同じくワークショップ形式だとしても、それぞれは似て非なるものなのだ。無目的を標榜した三田の家は間違いなく後者の試みだった。

もうひとつは「オートエスノグラフィー」、これも井本さんによる執筆だが、20 年前に著した「家族と感情の自伝」という僕の文章が、オートエスノグラフィーの一例として引き合いに出されている。それを著す少し前に、自立生活する障害者への聞き取りや参与観察を土台にした『生の技法』という仕事を公にしていたが、その時の経験から、つまり調査する自分自身への実存的な懐疑から、僕はオートエスノグラフィーに向かった。まさしくパフォーマティブ・シンドロームへの僕自身の最初の応答だったと言えよう。

最後にもし注文がつけられるなら、どのようなトッピングを本書に望むかという話。新次元のエスノグラフィーをテーマにする場合、旧世代との隔絶を明らかにしてくれる一つは、アートをベースにした調査実践をめぐる評価である。総称でアート・ベース・リサーチとされる諸実践の中でも、映像エスノグラフィー、パフォーマンス・エスノグラフィーなどが挙げられる。旧世代が科学から排除してきた「アート」をいかに取り込むかという話だ。その代表者の一人でもあるデンジンの仕事が一部紹介されてはいるが、ワードマップの「ワード」の一つとして立てても良かったと思う。たとえば映像。映像人類学の歴史は古いが、かつてのように記録媒体としての映像ではなく、アウトプットとしての映像の作品化、撮るもの撮られるものの関係を反省的に捉えた映像行為、ネイティブによる撮影実践など、パフォーマティブ・シンドローム以降のそれは、過去の映像実践とは全く違う次元にある。過去との切断面を具体的に解説す

る事例があれば、読者へのいい刺激になっただろう。とりわけ、最終産物としてのアウトプットが学術的文章ではないという事は、テキスト中心主義を脱し、社会科学アカデミズムへの強烈なインパクトであるがゆえに触れて欲しかったと思う。

「おわりに」にあるように、いまだ執筆者たちの意図は学術界全般での当たり前とはなっていない。ある騎士が、雪の日に凍結したボーデン湖を湖だと知らずに進軍し対岸に到着する。出迎えの村人から今まさに自分が置かれていた、いつなんどき氷面が割れるかもしれないという危険について知らされ、騎士は恐怖で正気を失い、落馬し亡くなったという物語がある。パフォーマティブ・シンドロームを無視して、人を「科学」しようとする社会科学にとって、本書が「村人」足りえるかは、これからの楽しみである。しかし、エスノグラフィーの時代にあって、新次元のエスノグラフィーを大なり小なり当然とする若手研究者の登場は心強い兆候ではなかろうか。彼らのリアリティの在処を本書の中でたぐり寄せるのも畢竟である。

（おかはら　まさゆき　慶應義塾大学文学部）